

キリスト教学専修

第二演習・2019年度後期******A. 予定** (同学年は五十音順)

キリスト教学研究室：

火曜日4時限目・1人 (+5時限目も可能)

60分の発表+30分の質疑応答

担当者は資料を準備の上、発表。パワーポイント使用可。

月日	担当者
10月15日	
10月22日	
10月29日	
11月5日	
11月12日	
11月19日	
11月26日	
12月3日	
12月10日	
12月17日	

追加の発表を希望する人は、火曜日4時限目(キリスト教学研究室)に発表を設定する。

B. 関連するプログラム

1. 研究室紀要の刊行：3月刊行

- ・第二演習での発表 → 論文、書評、サーベイ
- ・特別研究発表会(学会予行)：年2回、9月初旬と2020年3月中旬

- ・学会発表の予行＋書評・サーベイ
- ・原則的には：大学院生全員が参加（博士後期課程だけでなく）

C. その他

『新版 キリスト教大事典』（日本基督教学会／教文館）

大項目（3000）／中項目（1500）／小項目（500）

- ・現代プロテスタント神学（大項目）
- ・宇宙（コスモス）（中項目）
- ・永遠と時間（中）
- ・解放の神学（中）
- ・自然（中）
- ・自然神学（中）
- ・理神論（中）
- ・『義認と和解』（小）
- ・宇宙的終末論（小）
- ・技術社会と人間（小）
- ・キリスト教と科学・技術（小）
- ・神経神学（小）
- ・政治倫理（小）
- ・千年王国説（小）
- ・黒人神学（小）
- ・グティエレッツ（小）
- ・ボフ（小）
- ・J・コーン（小）
- ・パニカー（小）
- ・ピエリス（小）
- ・マクフェイグ（小）
- ・ジョン・A・T・ロビンソン（小）
- ・グリフィン（小）
- ・マッコーリー（小）
- ・波多野精一（小）

<事典から見えるもの>

1. 「キリスト教大事典」（1963年）

げんだいプロテスタントしんがく 現代プロテスタント神学[英]Contemporary Protestant Theology

K.*バルトや E.*ブルンナーを中心とした*弁証法神学者 ‘の一人は、この2人の<*神の像 imago Dei>に関する論争(1934)とともに解体し、欧州では3つの主要な神学的方向が出現した。その第1はバルト神学、第2はブルンナー神学、第3は*ブルトマンの実存神学で

ある。しかしこれらの3方向はある共通点を持っているため、3方向を明白に区別することは、あらゆる点において困難である。これら3方向は共に現代に宗教改革の神学を正しく再興しようと試みるものである。しかしバルトにおいては*カルヴァンの神学的遺産が、ブルトマンにおいては*ルターのそれが強く働いており、プルンナーにおいてはその中間がとられている。特に注意すべきことは、バルトが終始、神学的思惟の独自性を主張し、神学的思惟は普通一般の思想、殊に哲学的思惟と違って、啓示の下でなす、あるいは祈りの中でなす思惟であるという点に忠実であるのに反して、他の2方向は普通一般の学問的思惟の上に立とうとするという事実である。プルンナーと挟を分ってからのバルトの神学的方向は大きな変遷を見せ、*アナログア・エンティスの上に立つ*自然神学を強く否定し、*アナログア・フィデイの上に立って人間のなかに神の類比を認めるようになったばかりでなく、《神の人間性》という論文以来、人間の問題に注意を払うようになった。しかし彼の根本的立場は少しも変わっていない。

プルンナーの神学は初めから神学的人間学の必要を強調し、主として神学的倫理学の問題と取組んできたが、バルトとの分裂後は教義学の樹立につとめ、既に3巻を出版した。第3巻では彼の教会論を展開し、そこで信仰と聖霊とについて詳述している。バルトがあまりにも*ソラ・グラティア（恩恵のみ）を客観主義的に捉えすぎたことに対する反動とも見るべきはブルトマンの実存神学である。しかし、これら2人の差異は、前者が初めから説教者の立場に立って神の言をいかに語るべきかを問題としたのに反し、後者がもっぱら説教を聞く者の立場に立って、聴衆は聖書の使信をいかに理解するかを問題としたところにあると見ることもできる。ブルトマンは元来は新約聖書学者であって、原典解釈に対する*様式史的研究の提唱者であったが、弁証法神学に共鳴し、殊に*ハイデッガーの哲学に少からず影響を受け、《新約聖書と神話論》と、いう画期的な論文を書き(1941)、そののち20年間のはげしい論争の中心問題を提出した。彼にとっての出発点は、科学によって形成された現代人の思想と、新約聖書の神話的表象との間の差異である。聖書の神話的表象とは、天、地、地獄という3階建の世界像とか、悪魔や天使や悪霊によって支配されるところの人間の表象とか、地上の歴史を神の力と悪魔の力と力職とが戦う舞台とする見方などをいう。彼に従えば、こういう新約聖書の諸表象はギリシア風の*グノーシス主義の神話やユダヤ的・黙示文学的神話から由来したもので、今日のキリスト者はこういう表象を承認する何らの義務もない。むしろ新約聖書の使信を包んでいるこのような神話的表象をはぎとる（すなわち<*非神話化する>）必要がある。そのためには聖書を実存的に解釈しなければならぬ。実存的解釈とは、そういう神話的表象の中で、人間に対するいかなる実存的理解が表現されているかを問うことである。この非神話化のプログラムに対しては賛成とともにまた無数の不賛成の意見が述べられ、この問題に関する多くの書物がドイツのみならずイギリス、アメリカにおいても出版されている。

ブルトマン神学に対する反対論は大体つぎの2点にしばることができる。第1は、彼の非神話化の操作は結局、実存哲学をもってキリスト教の信仰におきかえ、その結果キリスト教の信仰を解消してしまうという点である。彼は歴史を学問的に批判することと、歴史に対して懐疑的態度をとることを混同し、その結果、信仰を歴史の上でなく、キリストについての信仰的説教の上に基礎づける。しかし新約聖書においては歴史のイエスと信仰のキリストとは切離されていない。

第2に、彼の非神話化の操作は、現代の理論物理学による認識論の革命的变化を知らぬかのように、ただ因果関係によってのみ貫徹された啓蒙哲学の宇宙をしか考えていない。したがって彼の神学は著しく合理主義的であって、最近の物理学によって初めて発見された啓蒙哲学の神話的性質に気づいていない。彼は聖書の神話を19世紀の神話によっておきかえるにすぎない。

以上の3方向の他に注目すべきは*ゴーガルテンである。彼はかつてはバルトと弁証法神学の共同戦線を張ったひとりであったが、バルトと快を分った後、一時はナチ政府に秋波をおくりドイツ・キリスト者に接近し、神学の主流から姿を没したかのようであった。しかし第2次大戦後は、沈黙を破って数々の著書を通じ、独創的な思索力ある神学者として再び前面に現れてきた。彼は過去においてはイエスの教えとパウロならびにルターの根本思想の解説に専心してきたが、現在ではこの世の世俗化とキリスト者がこの世に対してとるべき正しい態度とを中心題目としている。現代人の特色はキリスト教信仰から遊離し、自分の力によって自分自身を独得せんとする点にあるが、ゴーガルテンはこの態度を世俗主義と称してこれを排撃する。これに反して信者はこの世の奴隷となることから解放されて、この世に対する責任を感じこの世を形成するよう召された者である。信者によるこの世の形成は、教会の、あるいは宗教の課題でなくして、理性によって、そしてまたその時その時の事情に適した行為によって実現されねばならぬ。ゴーガルテンはブルトマンの非神話化の神学に賛意を表しているが、このことはやがてまたゴーガルテンもブルトマンと同様に聖書的思考と自分自身の実存哲学とを同一視し、聖書の啓示に忠実に従うことを忘れていと批評されねばならぬ。

現代のプロテスタント神学を論ずる者は、以上述べた欧州の神学の3方向が現代のプロテスタント神学の諸方向を代表するものと見てよい。アメリカの現代の代表的神学者たちも神学的方向としては大体において以上の3方向の外に出るものではない。ただアメリカという国を背景にしてその表現の仕方にいささか特色があるというにすぎない。アメリカで取上ぐべき神学者は2人ある。それはRe.*ニーパーと*ティリッヒである。前者は健康上の理由から今後の文筆的活動は期待できないが、現在までの著作について見るとプルンナーに近い。ティリッヒは彼の招きによってドイツからアメリカに渡って(1933)帰化したのであるが、今ではアメリカで最も重要な神学者のひとりで見なされている。彼は敬虔主義や聖書主義やあらゆる種類の正統派の神学を拒否して、哲学的神学または*弁証神学を打立てるために、まず第1に哲学と神学との正しい関係を規定しようとする。哲学(すなわち自然的人間)は問を發し、神学はその問に答える。彼はこれを哲学と神学との相関関係と呼び、この方法の上に彼の組織神学を打立てんとしている。彼がキリストとしてのイエスを神学の中心としようとする時、歴史上のイエスを意味していることは疑いないが、あまりにも端的に聖書の言葉を彼自身の哲学用語に翻訳してしまうことには危懼を感じさせる。彼は自分の神学を結局はひとつの実存哲学と化してしまい、神学を哲学に従属させる結果になる。たとえば、神を<存在 Being>として抽象的・中立的に把握することは、聖書の神観に固有の人格性をくらませるか、あるいは排除することになるであろう。要するにティリッヒはヨーロッパの新しい神学思潮を考慮しつつ実存哲学を媒介として自由主義神学を再建しようとしている点で、ブルトマンに通ずるものがある。

[文献] K. Barth, Kirchliche Dogmatik,4巻, 1932- ; E. Brunner, Dogmatik,3巻, 1953-60;

R. Bulmann, *Glauben und Verstehen*, 3 卷, 1933-60; H.W. Bartsch, *Kerygma und Mythos*, 4 卷, 1948-55; P. Tillich, *Systematic Theology*, 2 卷, 1951-58 : 邦訳, 組織神学 I, 上.下; Grützmacher, *Textbuch zur deutschen systematischen Theologie II*, 1961; L. ReiniSch, *Theologen unserer Zeit*, 1960. (菅 円吉)

2. 「新版 キリスト教大事典」(202*)

げんだいプロテスタントしんがく 現代プロテスタント神学 [英] contemporary protestant theology [独] Zeitgenössische protestantische Theologie [仏] théologie protestante contemporaine 1920年代からの100年間を「現代プロテスタント神学(組織神学, キリスト教倫理学, キリスト教弁証学を中心に)」で取り扱われるべき時代であるとするれば, 現代プロテスタント神学は自由主義神学批判を基調とする弁証法神学を中心に展開した1960年代までと, 弁証法神学から離脱と神学動向の細分化によって特徴付けられる1970年代以降とに区分することができる。

...

[文献] 熊澤義宣・野呂芳男編『総説 現代神学』日本基督教出版局, 1995年。森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』(教文館, 2005年)。栗林輝夫『現代神学の最前線——「バルト以後」の半世紀を読む』新教出版社, 2004年。 (芦名定道)